

「子育て学体系化のためのワークショップ」成果の検討

Discussions on the Outcomes of "Workshop for Systematization of Child Rearing Science"

西村美東士
Mitoshi Nishimura

要約（４００～６００字）

「子育て学の学的体系」のための研究の一環として、「子育て支援学体系化のためのワークショップ」を開催した。その特徴は、４つの保護者チームによりワークを行い、一定の方向付けのもとに成果発表を行ったことにある。本研究では、その成果から、子育て学体系化への手がかりを得ようとした。そのため、①(遊び仲間とのつきあいのために)母親との約束を守らなかった場合、どのような叱り方が良いのか、②ばらばらで遊んでいても、同じ空間にいるというだけで、一人ではないという満足感を感じている、③子どもがちょっと喧嘩をすると、相手の親が出てきてしまう、④自分も深い人間関係を持ってきたか、などのメンバーの見解を分析した。これらは、臨床的な実践研究、一家庭内だけでは完結しない問題への取り組み、「希薄化」など一般には通りやすい言説に対する再検討の必要などを子育て学に提言している。さらに子育て学体系化を進める上で取り組むべき課題として、①細分化された学問体系をつなぐ領域間分野の学問としての成立に向けた取り組み、②研究対象としての現場の子育て活動というとらえ方、③従来の知見のうち今日の子育てニーズに十分には対応できていない側面を把握し、現代化するための積極的な働き、④交友関係に関する従来の概念を再検討し、現代に即した概念を構築する努力、⑤優れた子育て者のもつ暗黙知をよりよく知り、活用を図ることが示唆された。(593 文字)

キーワード

子育て学体系化、子育てワークショップ、子育て暗黙知、社会開放型子育て観への転換、クドバス手法

1 研究の経緯と目的

1.1 日本子育て学会の課題

日本子育て学会では、以下の三点の特徴と意義を踏まえて研究を進めてきた¹。

第一は、「保護者、子育て支援者、研究者の三位一体の研究」である。そこでは、「現場すなわち保護者および子育て支援者と研究者の協同による問題意識」を中心に据え、「研究の成果は、直接的にも間接的にも子育て実践に役立つ」ことを目指している。

さらには、基本的役割分担としては、研究者は、「研究情報の収集、研究法の検討、報告書の作成や研究発表」などを行い、保護者と支援者は、「テーマ作り、実践活動の報告、チーム作り、研究の実施」などを行うと、規定されている。ただし、「ユニット（筆者注：各協同研究活動を指す、以下同じ）ごとに柔軟に対応する自由度をもつ。そうしたユニットの活動では自主性が尊重され、学会はそれを支援する態勢をとる」としている点にも注目したい。固定的な役割分担論では、学際研究は望めないということであろう。保護者、支援者の研究参画のための方法論の「柔軟な」追求が求められているといえよう。本稿では、その方法論の一つとして、「ワークショップ」を取り上げて検討する。

第二は、「さまざまな問題に答えられる学際的な学会」である。「子育てに関する実践研究には、医学、心理学、教育学、福祉学、社会学など様々な分野が関係するが、子育ての問題解決にはこれら一つ学問だけで十分行われるのではなく、それら相互の連携や協力も必要である。したがって、最終的にはこれら諸分野を糾合した学際的な学会を目指す」とされている。この「最終的な糾合」による次元の研究成果が「子育て学の体系化」ととらえた。

方法論としては、「実践に役立つと考えられるテーマを子育て現場から募集し、場合によっては学会や研究者が設定して、学際的な研究を行ってその結果を現場に反映させていく」としている。これまで各専門分野からはアプローチしきれなかった「実践に役立つと考えられるテーマ」をどのように「子育て現場から募集」すればよいのか。本稿がテーマとする「ワークショップ」は、その方法の一つと考えたい。

第三は、「保護者、支援者の組織的連携を図り、その要請に応える人材バンク的な機能を有した学会」である。「従来型の学会とは異なり、社会に開かれた学会にするため、保護者や子育て支援者の要請にできるだけ応じる」とし、そのため、「事業として、保護者を支援する組織間の研究や活動の連携を図ることも目指す」としている。そして、最終的には、「保

¹ 日本子育て学会ホームページ <http://www.kosodategakkai.jp>

護者や支援団体からの要請に応えられる子育て支援ネットワークの創設」を目指すとしている。

これは、子育て現場志向、市民参加型、社会開放型の学会の特徴をよく表したものであると同時に、人材バンク的機能を目指してネットワークされた子育て支援者の、研修と研究の必要性を示唆するものであると考える。各現場で孤軍奮闘している者が、参画し、交流し、学び合い、支え合うという一種の「生涯学習活動」が、子育て者、子育て支援者としての資質・能力を高める研修機能を発揮することが期待できよう。さらには、研修で伝承された「従来から引き継がれてきた子育ての価値」とともに、そこで創造された「子育ての新しい価値」が社会に発信され、研究者との協働によって「子育て学の構築」につながるに違いない。

とりわけ、支援者にとっては、研修と研究によって専門性が担保されるといえる。支援実践が研究成果としてまとめられ、学会における三位一体の研究活動によって、その知見が子育て者、支援者、研究者の共有財産としてさらに発展することを願いたい。本稿で報告する「親のワークショップ成果」も、その一環としてとらえたい。

1.2 研究交流委員会の構想

筆者は、2015 年度に研究交流委員長に就任し、常任理事会において図 1 のとおり「子育て学の学的体系」を提案し、承認された²。

図 1 では、「学的体系」を、テーマ群、学問群、分野・領域・研究対象、研究方法・手法群、理念研究、歴史研究から構成されたと考えた³。本図は、子育て現場の課題から発し、これをテーマ群として、関連学問と関連付けながらアプローチするとした点に、もっとも大きな特徴がある。関連学問が重要なのはもちろんだが、「現場のテーマを学問に結びつける」というよりも、「現場のテーマを結節点に置いて、関連する各学問を総動員して結びつける」という表現の方が適切と考える。以下、研究交流委員長としての筆者の個人的見解も含めて、論を進めたい。

² 当初は、「子育て支援学の体系化」として提案していたが、その後の常任理事会の議論で、「子育て学の学的体系の構築」に修正された。そのほか、現在の研究の進展に沿って、若干の修正を加えてある。なお、初出は次のとおり。西村美東士「参画型子育てまちづくり」から見た社会開放型子育て支援研究の展望」、私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者：松島鈞、原案作成者：西村美東士）『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究平成 17～21 年度研究集録』、pp.1-14、2009 年 12 月 20 日。

³ 図では、理念研究と歴史研究についての例示を省略した。

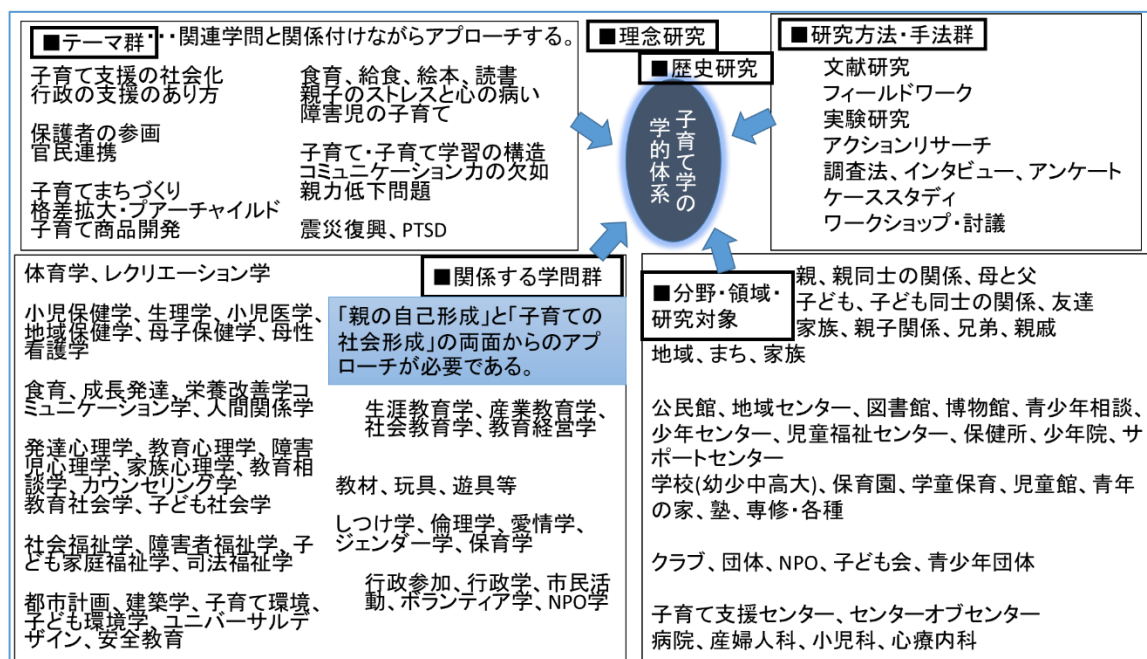


図1 日本子育て学会「子育て学の学的体系」研究全体図

次に、同じく図1では、関係する学問群を挙げた上で、「親の自己形成」と「子育ての社会形成」の両面からのアプローチを、各学問を横断する上位のコンセプトとした。これは、子育て現場の課題から発し、なおかつ社会に開かれた存在を目指す本学会にとっては、必然の結果と考えている。

1.3 「子育て支援学体系化のためのワークショップ」の開催

2016年10月29日に、聖徳大学生涯学習研究所との共催による標記ワークショップを実施した⁴。そのスケジュールは、ワークショップらしい時間は強いていえば最後の「討議とま

⁴ その趣旨は以下のとおりである。

聖徳大学は「保育の聖徳」として、子育て分野において、多くの研究・実践を積み重ねてきました。また、2005年～2009年には、文部科学省の指定を受け、「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」を様々な専門分野を持った教員がまとめあげました。

また、日本子育て学会は、これまでの保護者、支援者、研究者の三位一体の学会活動をもとに、子育て者や子育て支援者のニーズに立脚した子育て支援学の体系化を目指しています。

同学会との協働により、蓄積してきた知見を互いに交流したワークショップ成果「私たちに

とめ」である⁵。本事業では、むしろ本当のワークショップは事前に実施し、29日の本番では、その成果発表を行ったところに大きな特徴がある。本番に集まった当日の参加者によってワークをしても、不特定の層のため、そこで得るプロダクトは研究対象にはしづらい。そのため、本事業では、小学生の母親、高大生の母親、孫育て世代の母親⁶、父親の4チームについて、それぞれ別の日に事前ワークを実施して、本番は、その成果を発表して検討する機会とした。

そこで、本稿では、この事前ワークの成果を分析することによって、子育て学体系化への手がかりを得ようとした。

2 研究方法

2.1 ワークショップの方法と進行

筆者は、「今、何か考えがまとまりそうと思っているときに別のことを言われてわからなくなったりした」という学生の記述を取り上げ、「ワークショップでの対他者の体験だけで自己を質的に高めることはできない」として、「自己内対話をどう促すかという教育的視点」の必要性を提起した⁷。その視点から、カード書きにおける発言のない「空白の時間」を割り出しで可視化したことがある⁸。

カード書きの時間は、指導者から見れば、メンバーの発言もなく、思考プロセスも見えな

とっての子育ての課題」を発表します。その成果をもとに、講評を受けて、現代社会に求められている子育て支援学の体系化の方向を探ります。

⁵ チラシでは、「討議とまとめ」の方法について次のように説明している。

「生身（なまみ）の親」のニーズを出発点として、個人と社会の成員としての親の両面を確認しながら、子育てとともに、親の「花の生涯」の一環としての子育ての時期をより充実したものにしたい。そのために、ここでは、ワークショップ成果及び講師講評において指摘された課題をもとに、「子育て支援学の体系化」をめざして討議（15分間）とまとめ（5分間）を行います。

⁶ ワークにおいて、すでに成人し、親になるなどしているわが子、または子の世代の子育てに対して、孫に対するよりも強く、ときには切実な関心があることがわかったので、「祖母」とせずに、あえて「母親」とした。

⁷ 西村美東士「ワークショップ型授業の構成要素とその効果ー学生の自己決定能力を高める授業方法」、大学教育学会『大学教育学会誌』22巻2号、pp.194-202、2000年11月。

⁸ 西村美東士「出産・子育ての自己決定能力を育む大学授業の方法と効果ー女子学生（未来の母親）の社会化を支援する技法」、聖徳大学FD紀要『聖徳の教え育む技法』1号、pp.31-49、2006年12月。

い「空白の時間」である。しかし、それは、「今、何か考えがまとまりそう」という自己内対話の時間を保証することであり、それによりメンバーは、気づいていなかった自身の潜在的ニーズに気づくことができる。

カード書きによるこのような「深掘り」は、「アクティブラーニング」による能動的な気づきの一環として位置づけられる方法でもある。面接調査や質問紙調査では、このような成果は得られないと考える⁹。藤岡英雄はNHK学習関心調査から、学習行動を海面上の頂点とする「学習関心の氷山モデル」をまとめている。海面下に隠れている大きな部分は、顕在的学習関心と潜在的学習関心の2つによって構成されている。「関心ある学習項目」のうち、個人面接や自由回答で得られたものが顕在、調査票の学習項目を見てから得られたものが潜在である。後者は「外からの刺激や手がかりが与えられてはじめて意識される」ものである。しかもこれが一番大きい未知の部分と藤岡はいう。ワークにおけるカード書きは、その「未知の部分」に、メンバー自身がより能動的に踏み込むよう期待できる調査方法ととらえることができる。

以上のことから、自己内対話と話し合いによる作業を組み合わせ、各チームとも次のとおり進行させた。

各チームのワークの進行

【ワーク前半】

- ①[メンバー]小学生の母親、高大生の母親、孫育て世代の母親、父親のチームが、それぞれ4～5人程度で集まる（すべて別日程で行った）。
- ②[方向付け]村尾泰弘『家裁調査官は見た一家族のしがらみ』¹⁰の「あとがき」の前半部分¹¹

⁹ 藤岡英雄『学びのメディアとしての放送－放送利用個人学習の研究』、学文社、2005年8月。

¹⁰ 村尾泰弘『家裁調査官は見た一家族のしがらみ』、新潮新書、2016年7月

¹¹ 前半部分の趣旨は次のとおりである。

ギャングエイジの仲間関係における母親と自分の関係をめぐる逡巡や葛藤は、社会性を身に付ける上で大切な要素を有している。だが、遊び方の変化や塾通いなどの生活の変化から、ギャングエイジを経ない子どもが増えてきたと言われている。そのため、バラバラで遊ぶ、喧嘩をしなくなったなどの指摘がされる。このように腹を割って話をする場がないと、鬱憤がいつまでも晴らされず、何らかの形で暴発すると考えられる。このように、深い人間関係が扱えない、人間関係が切れやすいという点では児童から若者まで共通している。

- を、指導者（筆者）が読み上げる。必要に応じて用語を解説する。（20 分）
- ③[課題の共有]それぞれの課題を交えながら、子育ての課題を共有する。（20 分）
- ④[作業指示]指導者がワーク前半の残りの作業を指示する（指示後、指導者は退出）。（10 分）
- ⑤[カード書き(自己内対話)]自分の課題と村尾論文を照らし合わせて重要と感じたことを、A8 版のポストイットに、1 件 1 枚で一人 20～30 枚程度書き込む。（30 分）
- ⑥[カード配列]指導者が介入せずに、共有した課題に基づいて、クドバス¹²方式により、自分たちでカードを分類し、重要順に並べ、テーマを付け、「私たちにとっての子育ての課題」をまとめる。（40 分）
- 【ワーク後半】
- ⑦[方向付け]「あとがき」の後半部分¹³を読む。（20 分）
- ⑧[指導者介入型深掘り]指導者による問答法のもとに、各テーマを深掘りすることによって、「課題まとめ」と「課題解決の方法」を書き込む。（40 分）

2.2 子育て学体系化の視点からの成果の評価

¹² 職業能力開発手法「クドバス」(CUDBAS:Curriculum Development Method Based on Ability Structure、森和夫、1990 年)。参照文献：森和夫ほか『PROTS INSTRUCTOR'S HANDBOOK - Drawing up a Training Program』、海外職業訓練協会、1990 年。森和夫『現場でできる技術・技能伝承マニュアル』、日本プラントメンテナンス協会 2002 年 2 月。その他、同氏のホームページなど。クドバスでは、職業能力を分解して、知識、技能、態度の 3 側面から表記し、これを構造化して、そのまま学習プログラムに反映させるため、当然の結果として、プログラムの各回において獲得できる能力(学習目標)が明確に示される。クドバスは、汎用性が高いため、佐野市生涯学習推進 ID 作成等において、このチャート作成の手法を活用したことがある。西村美東士「市民参画を実質化する生涯学習推進の方法論－佐野市の生涯学習諸会議でのワークショップスタイルの導入と成果」、日本生涯教育学会『日本生涯教育学会論集』29 号、pp.13-22。本研究では、「私たちにとっての子育ての課題」のチャートをクドバス方式で作成した。

¹³ 後半部分の趣旨は次のとおりである。

今日子どもたちに対しては、次のような指導が重要である。第一に、小学生の段階から、親密な人間関係をつくらせる。第二に、社会性を身につけるような指導により、社会化を促進する。第三に、自分の気持ちや考えをきちんと言葉で表現できるような表現教育を行う。感情を言葉に換えて、その言葉をコントロールすることによって、感情を制御するのである。しがらみという言葉は、通常、まとわりつくものというネガティブな意味で使われるが、元来、「しがらみ」は、川の勢いをゆるめて我々の生活を守るものだった。その意味で、家族はまさに本来の意味でのしがらみでなければならない。

以上のワークの成果を、保護者の子育て現場からの問題提起としてとらえた上で、これをどのように「子育て支援学の課題」としてとらえ直すかを検討した。

3 研究結果と考察

3.1 ワークショップ前半の成果

「私たちにとっての子育ての課題」ワーク前半は、「ギャングエイジを経ない」、「バラバラで遊ぶ」、「喧嘩をしなくなった」などの特徴と、「深い人間関係が扱えない」、「このように腹を割って話をする場がないと、鬱憤がいつまでも晴らされず、何らかの形で暴発する」などの問題点を指摘した文章を読んだ上での、指導行為の入らない親同士の自主的なワークであった。詳細なデータはホームページに掲載した¹⁴。ここでは、紙面の都合上、小学生の母親チームの成果のみを掲載する。

表1 小学生の母親チームの「私たちにとっての子育ての課題」

I 小学生の母親	
1 現代の子どもたちのコミュニケーション能力の低下	
101	喧嘩も含めてたくさん話をすることで、わかりあえることがたくさんある。Aさん
102	腹を割って話をするということを子どもたちはしなくなっている。そもそも自分の言葉で意見を言える子どもが減っている。Bさん
103	コミュニケーション能力が欠けているから、深い対人関係が持てない。Bさん
104	ばらばらに好きなゲームをしていて、楽しいと感じるのだろうか。Cさん
105	話術があれば、友達、親、先生に悩み、喜び、悲しみを話して、共有してもらうことができる。Aさん
106	ばらばらで遊んでいても、同じ空間にいるというだけで、一人ではないという満足感を感じている。Aさん
107	たしかに、5、6人で集まって遊んでいても、全員で同じことはしていない。Dさん
108	外や公園で遊んでいる子どもたちさえも、ゲームをやっている姿をよく目にする。話もしないで、ひたすらゲームをやっている。Bさん
109	わが子(3人)と、どれくらい会話をしているのだろう。Cさん
110	わが子は何を悩んでいるのだろう。Cさん
111	家庭内のルール、自分が子どものとき、そして母になって。Cさん
2 ギャングエイジと向き合うことの大切さ	
201	わが子が悩んでいるときに、親と一緒に苦しみ、解決を見出せる存在になりたい。Aさん
202	母親との約束を守らなかった場合、どのような叱り方が良いのか、迷いながら子育てをしている。Bさん
203	ギャングエイジを経ない子どもが増えていると、私自身も感じている。Bさん

¹⁴ 西村美東士ホームページ <http://mito3.jp>

204	ギャングエイジを経ない子どもと、経た子どもとでは、違った成長をしていくのか。Bさん
3	喧嘩はコミュニケーションのツールの一つ
301	親友と呼べる友達がいるのか。Cさん
302	子ども同士、どんな会話をしているのか。Cさん
303	部活の先生の悪口しか言わない次女に対して、どう対応すればよいのか。Cさん
304	わが子も喧嘩はしないほうで、そのかわり家でイライラしている。Dさん
305	喧嘩をしないということは、腹を割って話すことがないからだと思う。Dさん
306	家と学校では違う顔を使い分けている。Cさん
307	喧嘩をしないということを、協調性があるということととらえて、親は安心してしまっているのではないか。Bさん
308	喧嘩をすることはいけないことだという風潮がある。小さいころから、親が喧嘩をストップさせてしまう。Bさん
309	子どもがちょっと喧嘩をすると、相手の親が出てきてしまう。Aさん
310	友達同士で話したうっぶん晴らしに使った言葉が、友達の親に筒抜けになってしまって、介入されてしまう。Aさん
311	喧嘩をしても、翌日には謝れる関係が友達同士で築けている。Aさん
312	親は、ときには見守る姿勢を持つことが大切。Aさん

ワーク前半の結果からは、メンバーの見解を、次のようにまとめることができる。

①「ギャングエイジを経ない」については、「ギャングエイジを経ない子どもが増えていると、私自身も感じている」(203)という実態確認とともに、「(遊び仲間とのつきあいのために)母親との約束を守らなかった場合、どのような叱り方が良いのか、迷いながら子育てをしている」(202)、「ギャングエイジを経ない子どもと、経た子どもとでは、違った成長をしていくのか」(204)などの迷いが表明されている。そして、「(ギャングエイジにおけるいじめなどで)わが子が悩んでいるときに、親と一緒に苦しみ、解決を見出せる存在になりたい」(201)という深刻で強い願いも書かれている。

ギャングエイジの過去の知見を繰り返すだけではなく、経験の有無とその影響に関するコーホート調査による実証が求められている。また、ギャングエイジを否定せずに、なおかつピアコンセプトのマイナス面を是正するような「知恵」など、臨床的な実践研究が求められている。

②「バラバラで遊ぶ」については、「外や公園で遊んでいる子どもたちさえも、ゲームをやっている姿をよく目にする。話もしないで、ひたすらゲームをやっている」(108)という実態確認や批判とともに、「ばらばらで遊んでいても、同じ空間にいるというだけで、一人ではないという満足感を感じている」(106)という子どもに対する共感的な記述も見られた。

交友関係については、従来の知見だけでなく、個人化社会の中での適応型についての知見

が求められている。

③「喧嘩をしなくなった」については、「わが子も喧嘩はしないほうで、そのかわり家でイライラしている」(304)という共鳴の記述とともに、「子どもがちょっと喧嘩をすると、相手の親が出てきてしまう」(309)などの、他の親との関係の問題が提起されている。

これらは一家庭内だけでは完結しない問題である。子育て仲間との関係性の中での解決の方向を探る必要がある。

④これに関連して、「深い人間関係が扱えない」については、「喧嘩をしても、翌日には謝れる関係が友達同士で築けている」(311)という子どもの現状を肯定する記述があった反面、「自分も深い人間関係を持ってきたか」(中高生の母親)という親自身の内省の記述も見られた。若い頃、「帰属意識や人間関係の希薄化」を指摘され、新人類¹⁵と呼ばれた世代が、今や50歳前後の孫育て世代に突入しようとしている。

このようなことから、「希薄化言説」については再検討が必要と考える。第一に、青少年だけの問題としてとらえるのではなく、中高年にまで視角を広げて、時代の傾向として論ずる必要がある。第二に、そもそも「希薄化」傾向なのか。「濃密化」傾向はないのか。個人化社会における選択的人間関係においては、「希薄化」と「濃密化」は二項対立ではなく、選択結果にすぎないという側面もあり得よう。第三に、今日の個人化社会における適応型として「希薄化」をとらえ直し、それがどのような意義を持っているかを明らかにし、その上でデメリットの所在と解決策について追求する必要がある。

なお、「このように腹を割って話をする場がないと、鬱憤がいつまでも晴らされず、何らかの形で暴発する」ということについては、どのチームもメンバーからはこれといった反論は出なかった。「希薄化言説」とともに、一般には納得しやすい説だからなのだろう。だが、NHKの2012年の調査によると、「とても幸せだ」(中学生55%、高校生42%)とする生徒が過去最高の増加率を示し、「思い切り暴れ回りたい」を「まったくくない」とする回答が69%にまで増加している¹⁶。多くの子どもたちは、親にも反抗せず、仲がよいのである。われわれは、一般には通りやすい言説についても、実証的立場から事実に基づいてその可否を検討し直し、解明するよう心がける必要があるといえよう。

3.2 ワークショップ後半の成果

¹⁵ たとえば中野収『会社に異星人がやって来た—新人類現象を読む』、講談社、1987年6月。

¹⁶ 日本放送協会放送文化研究所『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012—失われた20年が生んだ“幸せ”な十代』、NHK出版、2013年6月。

次に全4チームの「課題まとめ」と「課題解決の方法」の成果を表2に示す。指導者が問答法により介入をした結果ではあるが、それだけに、常識的な言説だけではなく、深掘りした「なま」の子育てニーズが示された面もあると考える。

表2 各チームの「課題まとめ」と「課題解決の方法」

	テーマ	課題まとめ	課題解決の方法
1 小学生の母親	1-1 現代の子どもたちのコミュニケーション能力の低下	自分の言葉で言えない。思いを閉じ込めてしまう。間違っただけを言ったら恥ずかしいと思っている。自分の言葉で考え、発信することができない。大人も子どもも忙しく、時間がない。	親子で会話して、よく話を聞いてあげる。「おかえりなさい、どうだった」と声をかけてあげる。心が通じ合うために、タイミングをつかまえて、声をかける。タイミングを捕まえるためには、心に余裕を持つことが大切。親の「返し」次第で子どもが話したくなる。
	1-2 ギャングエイジと向き合うことの大切さ	習い事などの約束した時間に間に合わない。	子どもを一人の人間として見てあげる。危険なこと、人を傷つけること以外は、のびのびとさせてあげる。自由にしてあげて、自分から約束を守らせるようにする。
	1-3 ケンカはコミュニケーションのツールの一つ	ケンカは程度を学ぶよい機会なのに、相手の親を気にしてしまう。抵抗としての暴力は認めるべきなのか。相手の痛みをわかっていたほうが良い。痛みがわからないから、暴力を使う。必要以上に子どもに介入する親がいる。教師も、その親を注意できない。	わが子が一番、自分の子ども中心で判断してしまうなど、いろいろな人がいる。そういうママには近づかないことが一番。思いやりの心をもって接する。信頼関係や相互理解は、長く付き合った末にできるもの。
2 高大学生の母親	2-1 コミュニケーションが大切	親子でちゃんと話してちゃんと聞く。時には口を出さずに見守る。子ども同士のストレートな交流を促す。	自覚的に子どもに関心をもつ。効率良く教えようとしなくていいことが大切。子どもを一人の人格として尊重する。よその子も視野に入れ、みんな育てていると思おう。親同士が遠慮せずにつき合える関係をつくる。自分だけで子育てをしているのではなく、みんな子育てをしているという風土をつくる。
	2-2 深い人間関係を持ってない	忙しいので、ものごとを効率良くサクサク進めたいという親の都合で子育てしている。	親も子も深く交流する体験の場をもつ。ズルはズルとして指摘し、真剣に向き合う経験をもつ。
	2-3 ストレスが多い	子どもたち自身も気を遣い過ぎている。	親も子も他人に良く見られたいという気持ちは悪いことではないけれど、気を遣わないでいられる場や相手をもつことが必要。

	2-4 決まり事を守る	決まりごとを守る、時には守らないことを子どもが自分で判断できる。	理由を聞いてあげて話し合い、子どもが自分の判断の善し悪しを判断できるようにする。ただし、特に女子の場合は、仲間に合わせなければならぬというマイナスの「しがらみ」があることを理解しておく必要がある。
	2-5 パラパラに遊ぶ	頭ごなしに否定してはいけないが、時には一緒に遊ぶ楽しさを体験させる。	子ども主導型で共同体験できるように誘う子どものリーダーを育てる(子どものチームワークづくり)。
3 孫育て世代の母親	3-1 今の親の問題	しつけができない。親子のけじめがない。親は自分の意見ばかり言う。省力化の中でそもそも子育てをしていない。世の中の理不尽さを子どもに教えていない。子育てをみんなの問題としてとらえていない。社会や地域の一員としての自覚に欠ける。	親としての自らの成長に気づかせる。親が子育てを楽しめるよう、祖父母がアドバイスする。
	3-2 思いやりの心を育てる	命を大切にできていない。相手の気持ちを思いやれない。自分本位に考えてしまう。親自身も兄弟との切磋琢磨がない。マイナス体験がない。ハンディのある人との交流が欠けているため、人に対して思いやりを持ってない。	看取り体験、喪失体験を持たせる。弱っていく人と接しさせる。命の大切さ、思いやりの大切さを言葉でも伝える。親は気持ちを表すための表現や表情を子どもに示すようにする。
	3-3 学校や先生の問題	教師は世間の大人としての見方ができていない。子どもの個人の良さを把握してほめることができない。ダメなところを探して指摘するのは簡単だが。	親はあまり学校をあてにせず、半分良ければ良いと思うようにする。しつけを学校に丸投げしてはいけない。
	3-4 いまどきの子ども	子どもが人間関係をうまく作れない。距離の取り方がわからない。相手を思いやれない。子どもが忙しすぎる。ギャングエイジの時代がない。親自身が、子どもを世の中に迎合するように育てている。	親子であっても別の人格。子どもの人格を尊重することが必要。親の価値観を子どもに押し付けない。「あなたらしく生きてほしい」と期待するのがよい。生活習慣、文化、道徳などの大事なことは教える。
4 父親	4-1 家庭内での問題	親同士のつながりが浅い。他人の子への無関心。親の公的意識が薄い。	親の参画体験を増やす。
	4-2 子どもの人間関係	希薄。深い関係を作ろうとしない。仲間外れにされるのを恐がる。	われわれの青年会議所(JC)では年下の面倒を見させている。勝ち負けから学ばせる。「俺は俺」で、迎合しない。共同体験、みんなでキャンプ設営など。テレビゲーム、スマホから分離させる。初対面の子たちの共同生活をさせる。

4-3 子どもの現状	心の問題。成長ができていない。気持ちのコントロールができない。 <u>JCでは、負荷がかからないと成長しないと考える。</u>	実体験を大切にする。 <u>負荷をかけて、不快を経験させてそれを処理させる。</u>
4-4 権利と義務の履き違え	子どもは、学校の先生に対して、友達のような扱いをしている。警察に対してでさえ、人権を守ってもらうのが当たり前と思っている。	挫折体験を味わわせる。教師の立場を強くする。親を教育する。主人公の体験をさせる。
4-5 地域とのかかわり	<u>安全に遊べる場所がない。</u> ゲームがコミュニケーションの道具。 <u>外で遊ばない。</u> 宿題、習い事で自分の時間がない。	子どもたちの居場所づくり。寺子屋で、親が他の子どもの相手をする。挨拶運動で、大人の目が守っている雰囲気を作る。「夢中体験」で、 <u>地域・学校の指導者の協力で夢中になれることを体験させる。</u>

以上のワーク後半の成果は、次の5つの「子育て学体系化の課題」を示唆していると考えられる。

① 細分化された学問体系をつなぐ領域間分野の学問としての成立に向けた取り組み

以下については、学問の領域の垣根を越えた研究が求められている。

3-1「親としての自らの成長に気づかせる」、「親が子育てを楽しめるよう、祖父母がアドバイスする」については、「多くの民族の文化は祖父母から孫に伝承される」という民族学の知見と交流したい。

3-2「命を大切にできていない」、「看取り体験、喪失体験を持たせる」、「弱っていく人と接しさせる」については、相互関与の視点から QOL 学の知見と交流したい。

3-3「教師は世間の大人としての見方ができていない」、「親はあまり学校をあてにせず、半分良ければ良いと思うようにする」、「しつけを学校に丸投げしてはいけない」、については、「親は学校についてどのような見方・考え方をすればよいのか」という現場の問題意識に基づき、学校からの答えだけではなく、教育学の枠組みを超えたさまざまな角度からの検討が必要である。

4-1「親同士のつながりが浅い」、「よその子への無関心」、「親が公的意識薄い」、「親の参画体験を増やす」からは、JC 等の活動をする父親が、「他の親がよその子への関心を互いに持っていないことを問題視している」ことがわかる。この点については、批判よりもまず客観的把握を重んずる学問の立場から、子育てと血縁とに関する日本の風土についてなど、文化人類学等の知見とも交流したい。

② 研究対象としての現場の子育て活動という考え方

以下については、現場の子育て活動を研究対象としてとらえた上で、研究と現場の実践との交流と往復によって研究を進めることが必要である。

2-3「親も子も他人に良く見られたいという気持ちは悪いことではないけれど、気を遣わないでいられる場や相手をもつことが必要」については、居場所の方法と効果に関する実践事例の分析等の帰納法的アプローチによって、支持的風土づくりのための指導者の効果的介入の方法など、子育て学の知見を集約して積極的な提案をしたい。

3-4「親の価値観を子どもに押し付けない」、「あなたらしく生きてほしいと期待するのがよい」については、教育の役割である「価値の伝承と創造」に関して、「教職とは異なる親独特の子育て現場における指導法の開発」が求められていると考える。

4-2「深い関係を作ろうとしない」、「仲間外れにされるのを恐がる」、「初対面の子たちの共同生活」については、「いつもの交友関係とは異なる者同士の交流」や「共同生活の構成要素と効果」を明らかにしたい。

4-3「J Cでは、負荷がかからないと成長しないと考える」、「負荷をかけて、不快を経験させてそれを処理させる」、4-4「挫折体験を味わわせる」については、長期キャンプ¹⁷などの活動について、「負荷をかけることや不快を与えることの教育的効果と留意点」等に焦点化して今日の視点からあらためて分析し、その結果を提供したい。

4-5「安全に遊べる場所がない。外で遊ばない」、「地域・学校の指導者の協力で夢中になれることを体験させる」については、冒険教育¹⁸等の効果に関する研究を進めたい。「危険を感じつつも挑戦する冒険」の教育的効果は絶大だからだ。

現場の子育て活動においては、いわば「現場力」というものが重要になる。その中心は「相手や状況の変化への対応力」であり、保護者や支援者のもっとも強い学習ニーズの一つであ

¹⁷ 文部省は昭和 63 年度から「自然生活へのチャレンジ推進事業（フロンティア・アドベンチャー事業）」の補助を開始した。これは、異年齢で構成される青少年に山奥や無人島などの大自然の中で 10 泊程度の長期の自給自足的な生活にチャレンジする機会を提供するものである。それは、これまで青少年教育を進めてきた関係者全体に対しても大きなインパクトを与え、関連文献も、この事業の意欲的な性格を反映して、子どもたちの意識変革、態度変容や健康管理まで含めての事前調査やフォローアップを計画的、組織的に行なった上で作成されたものが多かった。西村美東士（研究代表者）『現代青少年に関わる諸問題とその支援理念の変遷—社会化をめぐる青少年問題文献分析—』、科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書、p.49、2007 年 3 月。

¹⁸ 1994 年前後の文献からは、それらの体験学習の意義が、自ら望んで安全な世界から踏み出そうとする冒険教育の意義として主張されるようになる。前掲『現代青少年に関わる諸問題とその支援理念の変遷』、p.70。

ろうと推察される。だが、現在の子育て学の現状では、子育ての対象や状況のカテゴライズなどの研究は進んでいないように思える。これに対して、現場の暗黙知としては、ケースごとの判断基準が存在していると考ええる。研究としては、この「暗黙知」の可視化と客観化が求められよう。この点については⑤で検討したい。

③ 従来の知見のうちすでに今日の子育てニーズに十分には対応できていない側面を把握し、現代化するための積極的な働き

以下については、従来からの知見のうちすでに今日の子育てニーズに十分には対応できていない側面を把握し、現代の子どもや子育ての実態に適応したものとして現代化する必要がある。

1-2「自由にしてあげて、自分から約束を守らせるようにする」については、自由と課題の与え方¹⁹のバランスについて再考を促す指摘であると考ええる。これまでの「自由と規律」²⁰に関する研究成果を提供するとともに、現代化したい。

2-2「忙しいので、ものごとを効率良くサクサク進めたいという親の都合で子育てしている」については、現在の親の生活構造分析に基づいて、より現代に適応した現実的な子育ての方法を導き出す必要がある。そのポイントは、これまで強調されてきた家族の一員としての役割とともに、今日の個人化という時代の中で、個人としての充実を配慮することであろう²¹。

2-5「(バラバラに遊ぶことを)頭ごなしに否定してはいけないが、時には一緒に遊ぶ楽しさを体験させる」、「子ども主導型で共同体験できるように誘う子どものリーダーを育てる」に

¹⁹ 東京都青少年問題協議会が、1994年3月、学校に代表される計画され、整えられ、課題の用意された時間（課題のある時間）の中での成長のほかに、遊びに代表される自由な時間の中でのもうひとつの成長を重視するなど、いくつかの自治体で、従来の自主性の尊重から、外から与えられた課題のない自由時間の尊重への青少年育成の姿勢の進展が見られた。前掲『現代青少年に関わる諸問題とその支援理念の変遷』、p.69。

²⁰ たとえば池田潔『自由と規律ーイギリスの学校生活』、岩波書店、1963年6月改版。

²¹ 西村美東士「親子関係における気づき過程とその支援ー公開講座による子育て支援の実践」、『徳島大学大学開放実践センター紀要』12巻、p.83、2001年6月。筆者は子育てにおける「アンビバレンツ（両面価値）の受容」について、次のように述べた。「家族といるとき」に幸せとを感じるべきで、「一人でいるとき」に幸せとを感じる自分は問題があるというような偏狭な二項対立は本人自身も苦しめることになる。ワークでは、他者の「幸せの瞬間」に共感することによって、アンビバレンツな自己の価値観にも気づき、さらにはこれを受容するよう促そうとした。

については、ほかの子どもにとって魅力のある子どもの「統率力」とは何かについて、そのイメージを明確に提示したい。その際、今日の多様化傾向の中では、過去の「ガキ大将」とは異なる多様なタイプがあると推察される。従来のリーダーシップ論を画一的に適用するのではなく、各タイプに合わせたリーダーシップの涵養を図るべきであろう。そのためには、学問の各領域をまたぐ協働によって、現代の子どもたちの実態をぴったり言い当てるカテゴリーを実現したい。

このように、従来の学問体系による知見を適用するだけでなく、今日の子育ての現状とニーズに対応した刷新と新たな体系化を学際的に進めることが求められている。

④ 交友関係の従来の概念を再検討し、現代に即した概念を構築する努力

とくに現代の交友関係の理解のためには、関連する知見の「現代化」が特段に求められている。そこで、ここでは、「現代の交友関係への理解」として項を立てて考察しておきたい。

1-3「わが子が一番、自分の子ども中心で判断してしまうなど、いろいろな人がいる。教師も、その親を注意できない。そういうママには近づかないことが一番。信頼関係や相互理解は、長く付き合った末にできるもの」、2-4「特に女子の場合は、仲間に仲間に合せなければならないというマイナスの『しがらみ』があることを理解しておく必要がある」については、子ども、若者、若い親のすべての層に共通する交友関係の課題が関連している。それは、「そういうママには近づかない」という言葉に象徴される「選択的交友関係」である。なおかつ、相手によって違う「自分らしさ」が出てくる。それらのすべてが「自分らしさ」とであると信じて疑わない。これを、社会学の立場から「多元的自己」と呼ぶ論がある²²。

このような現状の中で、アイデンティティの確立をどのようにとらえ、支援するのか。あるいは、あえて「一元的自己」の追求を対峙させるなどの支援は可能なのか、意味があるのか。さらには、たとえば「ママ友」や「いつメン(子どもたちのいつもの仲間)」のような「選択的交友関係」の中で、「キャラという多元的自己を演ずる」ことは、仲間関係の中でのサバイバルとしては、また、自己のアイデンティティとしては、どのような意味と問題があるのか。

狭い学問領域の過去の蓄積だけでこれを論じようとしても、子育て現場や子どもたちには、

²² 浅野智彦「若者とは誰かーアイデンティティの30年」、河出ブックス61、2013年8月。浅野は、自らの青少年研究会の調査データ等に基づき、状況に応じて変化する「多元的自己」の拡大の事実を示す。その上で、これを従来の知見のように問題視するのではなく、多元的自己であっても、より生きやすい生き方や社会のために生かすことこそ重要という。

まったく響かない議論にしかならないと考えられる。現代の交友関係を理解するためには、多元的自己論、または状況主義的自分らしさに対する心理学・社会学・教育学さらには関連学問の統合的アプローチが求められる。

⑤ 優れた子育て者のもつ暗黙知をよりよく知り、活用を図ること

1-1「親の『返し』次第で子どもが話したくなる」、2-1「親子でちゃんと話してちゃんと聞く。時には口を出さずに見守る」については、子育ての現場（臨床）において、ときどきの状況の変化に応じた判断が必要になる事項である。どのように「ちゃんと話すのか」、どのようなときに「口を出さない」のか、そして、どのようなときにどのような「返し」をするのか。これは、先に述べたような「変化に対応する現場力」であり、「ケースごとの判断基準」を含む暗黙知に属することである。子育てや子育て支援の熟練者の行動を分析し、映像と暗黙知インタビューによって、現場の課題のとらえ方と判断基準を明らかにしたい。

このようないわば「子育て現場の臨床」からの帰納法的アプローチが、子育て暗黙知への学習ニーズに応える知見をもたらすものになると考える²³。

4 結論

以上に見てきたことから、親によるワークショップの成果は、子育て学体系化研究にとって示唆に富むものであったといえる。前述の「親自身がより能動的に踏み込むよう期待できる調査方法」という狙いが、一定の効果を挙げたものと考ええる。

親によるワークショップの成果は、大きくは、次の点で、体系化のために貢献した。

第一に、子育て現場のリアリティに研究を呼び戻す契機となった。親たちは子育てだけをして生きているわけではない。暮らしをして、仕事をして、そして地域の中で生きている。子育ては、一体化したそれらの一部として行われている。ところが、子育てだけを切り離して研究しようとした途端に、リアルな子育て活動からの乖離が始まる。これに対して、親によるワークショップの成果の発信は、研究を子育てのリアリティに呼び戻す契機となる。

²³ 森和夫、加藤敏子、西智子、津留明子、位田かつ代、西村美東士「子育ての暗黙知に関する研究－映像解析による保育者の子育て支援行動の分析」、前掲『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究平成 17～21 年度研究集録』、pp.411-422。保育者は「場の概念」→「到達目標概念」→「手段と時間の概念」→「空間上の運動概念」という流れで活動を行なう。森らは、映像分析と暗黙知インタビューによって、このような活動に潜む熟練した保育者の暗黙知を可視化できれば、より有益なノウハウや事実認識などの情報が逐次入手できるとした。

第二に、子育ての暗黙知の所在を示した。もちろん、子育ての暗黙知については、各学問領域で、それなりに追求は進められている。しかし、専門領域におけるこれまでの知見の蓄積に縛られない保護者・支援者の自由で純粋な経験知の中にこそ、子育てのリアルな暗黙知が存在すると考える。これに対する臨床的な研究と、その蓄積からの帰納法的追求は、専門領域のあいだのすきまを埋めるものになると考える。

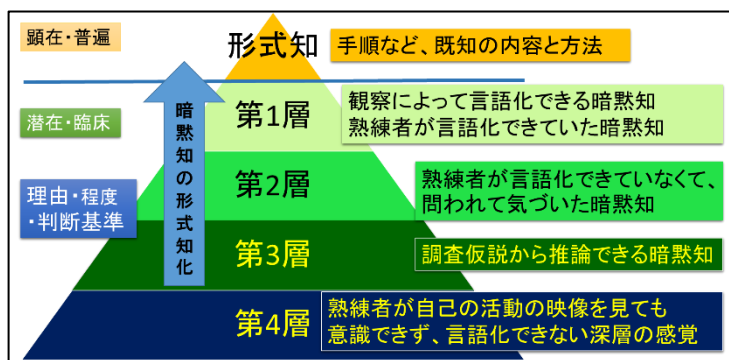


図2 暗黙知の形式知化に関する氷山モデル

筆者は、暗黙知の形式知化につ

いて、森和夫の指摘²⁴に従い、図2のとおり、形式知の下を海水面とする氷山モデルの構造を設定した。第2層より深層の部分は、子育てや子育て支援の熟練者の協力なしには解明できないと考える。

第三に、問題解決の志向性をもたらせた。子育てに関わる心理学や社会学でも、とくに基礎理論に関わるものは、実際の子育て活動には役に立たないという批判を聞くことが多い。しかし、それは、基礎理論自体が無意味であることを示すものではない。基礎理論は、子育て現場から現実の課題を与えられて、応用理論、実践理論へと発展する。さらには、子育て学の体系化にあたって重要なことは、それぞれの現実の課題に対して、その解決のために、学問領域間の協働が行われる。これが子育て学の体系化にほかならない。

以上に述べたワークショップの貢献は、本研究では、カード式発想法(クドバス手法)による網羅的把握に負うところが大きい。筆者は、クドバス手法について、5人程度で現場の課題を特定、共有し、カードを作成した場合、のちに100人以上のアイデアを募っても、異なる視点での新しいカードはまったくといってよいほど出てこないことを体験している²⁵。数人の書いたカードが、限定的な状況と課題については、全体をほぼカバーできるということ

²⁴ 森和夫らは、可視から不可視に進む第1層から第4層までの「暗黙知の階層」を示した。筆者の作図もこれに習ったものである。森和夫ほか『能力開発の実践ガイド』日本能率協会コンサルティング、2013年10月、p.57。

²⁵ 西村美東士「クドバスを活用した子育て学習の内容編成—高校生の子をもつ親のために」、聖徳大学生涯学習研究所紀要『生涯学習研究』3号、pp.41・54、2005年3月。

は注目に値する。

また、自己内対話及び問答法による潜在的ニーズの発掘も効果があった。

さらに、ワークショップは、真面目で現実的な目的のために、メンバーが一致して協力し合い、なおこれがかつ個人の豊かな発想を楽しく出して、それらを楽しくまとめていくプロセスである。これをシリアスファン(まじめで楽しい)と呼ぶことができる。そこには、堅苦しくなく気楽に参加してよいという意味も含まれている。ここに親による研究参画の大きな意義がある。

子育ては、親にとって「花の生涯」の中の味わい深い大切な時期の一部である。そのような子育ての主体者にとって、ワークショップもシリアスファンを味わえるものにすることが重要であり、それによってこそ、リアルな子育て課題が浮かび上がってくると考える。

5 今後の課題

筆者は、子育て学体系化が理想とするコンセプトとして、「個人完結型子育て観から社会開放型子育て観への転換」を挙げている。これまでのわが国においては、子育て支援が施策化された当初から、「子どもを産み育てることは、個人の自由意思に属することが尊重されるべきものである」という考え方が強く、「閉鎖型子育てモデル」を前提とした「個人完結型子育て観」に基づくものになっていた。そのため、子育て支援は、社会形成に寄与するかどうかについて、確かな見通しのないままに、個人の「自由意思」による子育てを支援すること以外に方法は取り得なかった。

今回、親のワークショップ成果が、子育て学体系化のために示唆したことは数多くあったが、その根底に多くの親自身が気づいていない「潜在の子育て学習ニーズ」として、子育ての個人化状況の中での、社会開放型子育て観の獲得があると考ええる。

だが、子育て学の体系化も、そのコンセプトの確立も、今は緒に就いたばかりである。今後は、バリエーションを拡大し、そこから帰納法的な追求を行い、保護者・支援者・研究者の協働による学的体系の構築に取り組む必要がある。

英文要約(200 語～250 語)

[Abstract]

Japan Society for Research and Practice on Child Rearing is addressing to build "academic system of child rearing science". We held "A Workshop for Systematization of Child-rearing Support Science". Its features were that four parent teams conducted a work under a certain direction beforehand to present.

In this study, we tried to obtain clues to systematize Child Rearing Science from the outcomes of this workshop. Therefore, we analyzed the following Members' Views: (1) What kind of scolding is preferable when my child failed to keeping promise with his or her mother (because of association with playmates), (2) Even if children are playing separately, or not together, they feel satisfaction of not being alone only because they are in the same space, (3) When my child fights a bit, the opponent's parent appears, and(4) I'm not sure whether I also brought deep human relationships. These recommend the necessities for clinical practice research, approaches to problems that are not resolved only within one family, and reexamination on commonly easy-to-understand discourses such as "dilution".

It was suggested that the following five items are essential for promoting the systematization of child rearing science: (1) Initiatives to establish child-rearing science as a multi-disciplinary study that will connect segmentalized academic frameworks, (2) Approaches to on-site child rearing as a research subject, (3) Revision of existing findings that can be recognized as being obsolete, (4) Efforts to revalidate and modernize the notion of friendship, and(5) Better understanding and utilization of tacit knowledge possessed by excellent child raisers. (250words)

[Key words]

systematization of child rearing science, child rearing workshops, child rearing tacit knowledge, conversion to social open-type child care views, CUDBAS method

研究のメッセージ(400 字～800 字)

日本子育て学会では、子育て学の学的体系の構築に取り組んでいます。そのためには、保護者、支援者、研究者が三位一体となって、現場からの子育て課題の提示や、課題解決の方法の提案を行うことが求められています。

本研究では、親によるワークショップが、子育て学の学的体系の構築に対して与えた重要な示唆を、いくつか抽出することができました。親たちは子育てだけをして生きているわけではありません。暮らしをして、仕事をして、そして地域の中で生きている。このような親によるワークショップの成果の発信は、研究を子育てのリアリティに呼び戻す契機となったと考えます。次に、保護者・支援者の自由で純粋な経験知の中にこそ、専門領域のあいだのすきまを埋める子育てのリアルな暗黙知が存在することが示唆されました。さらに、親たちが示した問題解決志向は、そのための学問領域間の協働を訴えるものです。

「子育ては親育ち」とか、「子の気持ちに寄り添う」、「親も自己肯定感を持つ」などの言葉が躍っていますが、「親はどのようなとき、どのように育てばよいのか」、「親が子の気持ちに寄り添って、そのあと何をするのか」、「親が自己肯定感を持つためには、その根拠をどこに求めたらよいのか」など、少し深く考えた途端、子育て学関連の各専門領域だけでは、確かな解が見つからないことに気づきます。これは、子育て研究からの子育て現場への専門領域を横断するアプローチの不足とともに、専門領域間のすきまを埋める親や支援者からの子育て研究への問題提起の面も欠けていることに起因していると考えられます。

本稿で提示したワークショップによって、「子育てのまじめな楽しさ」と「花の生涯の一環としての子育て」を再確認するとともに、子育て学の学的体系のための三位一体の研究を進めたいと考えています。(756 文字)